

## 地域情報（県別）

### 【茨城】医師がコスプレで診療「病気は楽しく治せる！」-乾智一・サンキュー耳鼻科クリニック 院長に聞く◆Vol.1

2020年2月14日 (金)配信 m3.com地域版

コスプレで診療するユニークな医師が茨城県ひたちなか市にいる。「サンキュー耳鼻科クリニック」院長の乾智一氏は、2015年から診療時にさまざまな衣装を着て患者に相対している。衣装の質が高く、振り切っている印象を受けるが、なぜコスプレで診療をするようになったのか。もともとコスプレが好きだったわけではないという。乾院長が衣装を着る背景には、医師としての患者への思いがあった。（2020年1月8日インタビュー、計2回連載の1回目）

▼第2回は[こちら](#)

—まずは、乾院長の経歴とサンキュー耳鼻科クリニックの概要についてお聞かせください。

僕はここ、ひたちなか市に生まれました。2004年に秋田大学医学部を卒業して愛知県豊田市で研修を受けた後、東北大学病院の耳鼻科に入局して気仙沼市立病院に勤めました。それから沖縄が好きだったこともあって琉球大学医学部附属病院の医局に移り、浦添総合病院、豊見城中央病院、沖縄県立南部医療センター・こども医療センターで計6年半ほど働きました。地元に戻って開業したのは2014年です。

当院に来る患者さんは現在、お子さんが4割、成人が6割で、お子さんは5歳前後の子が一番多いですね。スタッフは僕を含めて15人が在籍しています。



「ライオンキング」がテーマの衣装を着た乾院長

—コスプレをしながら診療しているそうですが、どんな経緯で興味を持ったのでしょうか。

きっかけは、2015年に行ったクリスマスイベントでサンタさんの衣装を着て診療したことです。当院は開院当初から季節や行事に合わせてイベントを行っていて、院内をそれっぽく飾り付けたり、輪投げ大会やじゃんけん大会を開いたり、3月9日の「サンキューの日」にはスタッフ皆がアロハシャツを着て患者さんを出迎えたりしていました。

クリニックでの診療は患者さん・スタッフ共にマンネリ化しやすいと思うんですね。患者さんの多くは一般的な急性疾患ですから、「喉が痛くて来ました」「では検査をしてみましょうね」「このお薬を飲んでみましょう、お大事に」といったように会話も単調になりやすいのが実際のところ。そんな中で、患者さんとスタッフの双方に良い刺激を与えつつ患者さんからすれば当院をより深く知ったり、待ち時間を楽しく過ごせたりできる手段として定期的にイベントを開いていました。

—イベントを行っていること自体、珍しいですね。それまでにコスプレをしたことはなかったのでしょうか。

プライベートでは全くなく、過去の診療でも1度あったかなかったかおぼろげです。イベントの一環として「コスプレをしてみたらどうだろう」と閃いてやってみたわけですが、これが思いのほか評判が良かった。

「怒る人いないかなあ」「でもポピュラーなサンタさんだから大丈夫じゃないか」といったように心配な気持ちが全くなかったわけではありませんでした。いざ衣装を着て診療してみると、「あら、今日はサンタさんなんですね！」などと喜んでくれる人が大半でした。お母さんがお子さんに向かって「ほら、サンタさんだから大丈夫だよ。怖くないよ」と言ってくれることもありました。

「意外と受け入れられるんだな」と気を良くした僕は、翌年2月の節分の時期に鬼のコスチュームを着て診療しました。すると、「今度は赤鬼ですか」「なんだか来るのが楽しくなりますね」とまたポジティブな声。5月のこどもの日に合わせては金太郎の衣装。「桃太郎で来るかと思ってました。金太郎とは」といった声が聞かれ、「サンキューでは何かやるだろう」「今度は何をやるのだろう」と患者さんの期待感まで感じられるようになったのです。

そしてあるとき、思いました。「これ、脱がなくていいのではないかと。それまでは行事などに合わせて1週間ほどコスプレで診療し、以後は通常通り白衣だったわけですが、3週間ほどもすればまたコスプレ衣装を着るわけですから。きっかりとなったクリスマスシーズンから半年後には、常にコスプレ姿で診療するようになっていました。



診療を頑張った患者には大きな称賛と拍手を送るという

——そんな経緯が、それにしてもコスプレの質が高く、振り切っている感があつてすごい。始めた当初、恥ずかしさはありませんでした？

あったのかもしれませんが、やる度に羞恥心は消えていきました。当院は「病気を楽しく治せるクリニック」として患者さんに認知していただきたいと思っているんですね。

おこがましいかもしれませんが、病気を「大」「中」「小」とあえて分けるとすれば、がんや脳梗塞、脳出血などが「大」に、骨折や肺炎などが「中」に、そして風邪やインフルエンザなどが「小」に分類されるでしょう。クリニックに来院する患者さんの多くはこれらのうち「小」の方々であり、この領域の患者さんであれば楽しく治してもらうのはありだと僕は思うのです。

それというのも、患者さんの共感が広がっているからです。当院では「小」の方が多いので分かりませんが、もしかしたら、「中」や「大」の患者さんであっても同じような気持ちを持ってくれるかもしれません。少なくとも僕が「大」の治療を受けるのであれば、こんなコンセプトで治療を行っている医療機関を受診したいと思います。病気や治療のつらさが和らぐのではないかと。

——なるほど。コスプレはクリニックのコンセプトを実現するための手段の一つであると。

はい。当院ではイベントやコスプレだけではなく、診療時にも患者さんに楽しんでもらえるような取り組みを行っています。

それは、患者さんをとにかくよく褒めること。たとえば薬をちゃんと飲めていたり、処置を頑張っていたりすれば、「わあ、すごい！」と診察室にいるスタッフ皆で認め、拍手をします。病気が治って診療が終わったときには、「合格」と記された札を掲げます。遠くにいるスタッフも診察室での拍手が聞こえたら一緒に手を叩きます。

「そんなオーバーな」と思う人がいるかもしれませんが、人に喜んでもらうためにはそれくらいがちょうどいいのだと僕は思います。僕はスタッフに「1回の診察で患者さんを10日分褒めよう」と伝えていて、こんな診療を行っている、お子さんだけではなく高齢の方も「こんなに褒めてもらったのは久しぶり」と顔をほころばせてくれることがあります。

楽しさは人に伝わるものですから、まずは自分が楽しくなければいけません。「楽しさは自分から出さないといけないよ」とスタッフに言っていることを自ら実践する意味でもコスプレを続けているのです。

◆乾 智一（いぬい・ともかず）氏

2004年秋田大学医学部卒。研修終了後、気仙沼市立病院に勤めた後に沖縄へ。琉球大学医学部附属病院、浦添総合病院、豊見城中央病院、沖縄県立南部医療センター・こども医療センターで6年半ほど働き、2014年に地元の茨城県ひたちなか市に戻って「サンキュー耳鼻科クリニック」を開業。2016年からコスプレ衣装を着て診療を行っている。日本耳鼻咽喉科学会耳鼻咽喉科専門医。

【取材・文・撮影＝医療ライター庄部勇太】

記事検索

ニュース・医療維新を検索

